

令和6年度

入学試験問題

国語

注意事項

1. 試験問題は指示があるまで開かないでください。
2. 解答は必ず解答用紙に記入してください。
3. 字数制限のある問題は、句読点や符号も解答の字数に含みます。
4. 問題冊子・解答用紙に、受験番号と氏名を記入してください。
5. 問題冊子は必ず持ち帰ってください。

受験番号	氏名	

近畿大学附属広島高等学校東広島校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

昔から「信じる者は救われる」と言われます。何を信じるか、何を信じたらいいのか、というのは永遠の問いです。そして、いまを生きるわれわれの心の問題の多くは、「何も信じられない」というところに発しているのではないかとも思います。^A「信じる」という行為は、人にとつてはきわめて重要なこと^Bで、それは、「ものごとの意味を問う」という近代^B的な問題と密接に関係しているのです。

近代以前の世界には、ヨーロッパでもアジアでも「宗教」というものが厳然と存在し、人はその中で生きていました。むしろ、現代の私たちも、人が死ねば葬式をやりますし、お盆やお彼岸には墓参りもします。そういう宗教はいまも依然としてありますが、かつての宗教はそれとはまったく違うものでした。

「信教の自由」という言葉があるように、現在の宗教は個人が自由に選びとれるものになりましたが、^①かつての宗教は、人びとが生きている世界そのもの、生活そのもの、もつと言えば、人びとの人生と一体化したものでした。

信仰を意味する「レリージョン (religion)」の語源は、ラテン語の「レリジオ (religio)」で、制度化された宗教というニュアンスがあります。つまり、宗教というのは「個人が信じるもの」ではなく、「個人が属している共同体が信じているもの」だったのです。

共同体の生き方そのものですから、そこに生きる人にとっては疑問のヨチのない説得力を持っています。ゆえに、「私は何を信じたらいいのか」という問い自体が生まれてきません。これは非常に幸せな状態^アだったと言えます。

なぜ幸せかと言うと、人生の中で遭遇する出来事に対して、いちいち疑問を感じたり、自分で意味を探し出したりする必要がないからです。I、私はなぜ生まれてきたのか、私はなぜ不幸なのか、なぜ病気になったのか、なぜ人を敬

わねばならないのか、なぜ働かねばならないのか、死とは何なのか……。こうしたことに対して、自分のまわりの世界のほ

うが、あらかじめ答えを用意してくれていたのです。意味を自動的に供給してくれていたのです。言ってみれば、母親の子宮の中で被膜に守られ、栄養をもらって生きている胎児のようなものです。

したがって、かつての人びとは、「私の人生はいったい何だったのか」といった飢餓感をあまり感じることなく、「何かたらふく食べたな」というある程度の満足感のうちに、一生を終えることができました。

いまわれわれは「当時の人は迷信の中に生きていた」などと言いますし、ときには「個人の自由が縛られていて不幸だった」とも言います。が、それは後知恵であって、^②当時の人びとはけっして不幸ではなかったのではないのでしょうか。

これを逆に言えば、近代以前は、人が何を信じ、ものごとの意味をどう獲得するかという問題は、「信仰」によって覆い隠されていたとも言えます。そして、信仰の覆いがはずされ、「個人」にすべての判断が託されてしまった近代以降、[◎]解決[◎]したい[◎]苦しみ[◎]が始まったと言えます。

^①ウエーバーが取り組んだ「宗教社会学」は、キリスト教だけでなく、ヒンドゥー教や仏教など、世界宗教を社会学的に解明し、信仰によって覆い隠されていたものが一枚ずつ皮をはがされるようにむき出しになっていく過程を追究したものです。

宗教などを抜きにして、自分がやっていること、やろうとしていることの意味を自分で考えなさい——。これは非常にきつい要求です。何かを選択しようとするたびに、自我と向きあわねばならず、その都度、自分の無知や愚かさ、醜さ、ずるさ、弱さといったものを見せつけられることになります。その点では、逆説的に聞こえるかもしれませんが、「現代人は心を失っている」という言い方は間違いで、前近代のほうがよほど心を失っていたのです。

これは人にとつてはたいへんな負担ですから、当然、耐えられない人が出てきます。そこで、^③心のよすがとして、やはり何らかの宗教が必要とされる、ということになるわけです。

要は、「それが、その人にとつて信ずるに足るものであるかどうか」ということが重要なのです。そして、再び出発点に戻っていくようですが、それを信じるか信じないかというのも、個人の自由なのです。

ですから、究極的には、「信じる」ということは、「何かを信じる」ということではなく、「自分を信じる」ということになると思います。

言うなれば、「二人一宗教」^①「自分が教祖」^②なのです。

人生とは、自分がどうすべきなのか選択せざるをえない瞬間の集積であり、それを乗り越えていくためには、何かを信じて答えを見つけないければなりません。生身の人間ですから、どうしてもいいかわからなくて、たじろぐこともあるでしょう。たとえば、誰かを愛したとき、どんな関係を選びとるのか。相手に対する気持ちが変わらなくなったとき、どうするのか。子どもを産むのか産まないのか。苦しい経験をしたとき、どう乗り越えるのか。治らない病気になったとき、死とどう向きあうのか。

意識していようとまいいと、人は信ずるところのものから、ものごとの意味を供給されます。意味をつかめていないと、人は生きていきません。

そのための方法はいくつかあると思います。擬似宗教に拠った生き方をする方法もあるでしょう。時に応じ、場合に応じ、何かに身を預けて危機を切りぬけていく方法もあるでしょう。要は、そこから与えられた答えに納得して生きていけるのなら、それでいいのです。あるいは、最初から何も考えず、滑っていくことに妥協できるなら、それも一つの方法かもしれません。

Ⅱ、そのどれにも納得できないなら、何ものにも頼らずに、ウェーバーや漱石^③のように、自分の知性だけを信じて、自分自身とテッテイ抗戦しながら生きていくしかありません。これは相当苦しい方法で、極端に言えば、頭上に刃をぶら下げて、いつ脳天につきささるかわからない状態を続けていくようなものです。気が狂いそうになることもあるかもしれません。

そして、私が彼らにもっとも尊敬の念を感じるのは、この部分においてなのです。彼らは「自我」と「何を信じるか」と

いう近代以降の難問に、独力で立ち向かいつづけたと思うからです。

ウェーバーはみずからのことを「宗教的音痴」と自嘲気味に語っていましたが、まるで神なき時代の信仰者のように、自分の知性を信じて絶対にユズらない人でした。

漱石も同じです。たとえば『行人』などがまさにそうで、主人公の一郎は、過剰な自意識ゆえに、妻を信じられず、家族とも友人とも打ち解け合えずに七転八倒しますが、その苦しみを何にも託すことができず、さらに苦悩します。その姿は漱石自身を髣髴とさせるものがあります。

そして、かくいう私も、自分を信じるしかない、「二人一宗教」的に自分の知性を信じるしかないと思っています。

自分でこれだと確信できるものが得られるまで悩みつづける。あるいは、それしか方法はないということを感じる。それは「不可知論だ」と言う人もいるでしょう。でも、途中でやめてしまったら、それこそ何も信じられなくなるのではないかと思います。

「信じる者は救われる」というのは、究極的には、そういう意味なのではないでしょうか。何か超越的な存在に恃むという他力本願のことではない、と思います。

（姜尚中『悩む力』より）

※出題にあたり、本文を省略したところがある。

（注） ウェーバー＝マックス・ウェーバー。ドイツの社会学者。

よすが＝よりどころ。

髣髴とさせる＝ありありと連想させる。

不可知論＝ものごとの本質は我々には知り得ず、認識することが不可能である、とする立場のこと。

問一 二重線部⑦「ヨチ」・⑧「テッテイ」・⑨「ユズ」・⑩「バットウ」のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄

I

II

に入れるのに最も適当なものを、次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア だから イ つまり ウ たとえば エ しかも オ かし

問三 傍線部①「かつての宗教は、人びとが生きている世界そのもの、生活そのもの、もつと言えば、人びとの人生と一体化したものでした」とあるが、宗教と人生の「一体化」を比喻を用いて表現した箇所を、本文中から三十五字で抜き出し、始めの五字を答えよ。

問四 傍線部②「それは後知恵であって」とあるが、ここで筆者はどのようなことを表現しているのか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 人間は、知性による文化的な営みを蓄積することによって進歩し続けているのだから、現代に生きる私たちが近代以前の人びとを「不幸」だったと考えてしまうのは無理もないことだ、ということ。

イ 近代以前の時代のありようを「不幸」と認識するのは、近代以降に獲得された「自由」という価値観に基づいているからであり、当時の人々の心理を正確に把握したものとは言いがたい、ということ。

ウ 人間は、その時代に培われた知力によって生活をより良くしようと努力しているのであり、現代の知力によるものの見方で近代以前の生活を「迷信」などと批判するのは不謹慎だろう、ということ。

エ 現代思想に依拠しているから、近代以前の考え方を「不幸」と感じてしまうだけであって、普遍的価値観によって人間を捉えれば、当時の人びとの方が「幸福」であったと言えるのではないか、ということ。

問五 本文を読んだ生徒たちが、内容について話し合いをしている。以下の会話を読んで後の(1)～(3)の問いに答えよ。

生徒X——『信じる』という行為は、人にとってはきわめて重要なこと(二重波線部A)とあるけど、なぜそんなに重要なのかな。

生徒Y——直後に「近代的な問題」(二重波線部B)とあるのがヒントになりそうだ。近代になって宗教が(三)も
のになったことよって、何を信じて生きるかを自分で考えなくてはならなくなったんだよね。

生徒Z——それを筆者は「解決しがたい苦しみ」(二重波線部C)と表現している。何を信じるのかを考える苦しみは生
きる上で避けられないものなんだね。

生徒X——確かに。「何かを信じて答えを見つけなければなりません」(二重波線部D)とまで言っているしね。「信じる」
という行為は、生きる上で欠かせない「きわめて重要なこと」だ。結局私たちは何を信じて生きていけばい
いんだろう。

生徒Y——そこが、筆者の主張の肝心なところだ。筆者は(五)を信じて生きていく、と考えている。「信じる
者は救われる」という言葉の一般的な認識とは異なる、素敵な解釈だなあ。

生徒Z——同感だ。「自分が教祖」(二重波線部E)というのは(六)と言えるね。

(1) 会話中の空欄 ③ ・ ⑤ にあてはまる言葉を、③は十一字、⑤は五字で、本文中から抜き出して答えよ。

(2) 会話中の傍線部④「信じる」という行為」が生きる上で欠かせないのはどうしてか。その理由を、「意味」という言葉を用いて、八十字以内で説明せよ。

〈下書き〉

(3) 会話中の空欄 ⑥ にあてはまる言葉として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分の人生に対する気概や覚悟が感じられる表現だ

イ 周囲から孤立した自分自身を卑下する比喩的表現だ

ウ 読者の緊張を解きほぐすための、ユーモアに富んだ表現だ

エ 自分が到達した境地を誇示する、自画自賛した表現だ

問六 本文の説明として適当でないものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 近代化という、時代の大きな転換がもたらした人間心理の変化を、前近代と近代以後の比較を通してわかりやすく説明している。

イ 著名な学者や文学者を具体例として提示し、それらの人物の思想を評価することによって、筆者の主張に一層の説得力を持たせている。

ウ 信仰や宗教を否定するというテーマを、随所に疑問文を用いて読者に語りかけながら展開することで、理解しやすく表現している。

エ 古くからよく知られた言葉について、現代を生きる人々の生活や心理に寄り添いながら、筆者の解釈を論理的に示している。

二

三郷^{みさとしん}心は、北九州にある工業高校の電子機械科に通う二年生であり、科ではただひとりの女子生徒である。三年生の原口や同級生の亀井らとともに、高校生ものづくりコンテストへものコンをを目指すことになり、旋盤^{せんばん}（金属を回転させて、切ったりけずったりする〔切削^{せつぎょく}すること〕の練習に励んでいる。ある日、高校の卒業生で、ものコンの全国三位入賞者でもある崎原^{さきはら}由希子^{ゆきこ}に來校してもらい、旋盤を教えてもらうことになった。次の文章は、それにづく部分である。これを読んで、後の問いに答えよ。

実際の崎原さんは思っていたよりも小柄な女性だった。身長百六十七センチの心よりも軽く十センチは低そうだ。

「崎原由希子です。現在は名古屋の株式会社ヤマシンに勤めています。会社では人材育成のプロジェクトに参加していて、〈技能五輪〉のための練習をしています。年齢制限で今年が最後の挑戦になるので、悔いのないようにやろうと思います」

⑧ 新聞と変わらない控えめな笑顔でそう自己紹介をした。こんなおとなしそうな女性が、男だらけの工業技術の第一線で活躍しているのが、意外な気がするほどだ。

「じゃあ、さっそく崎原に練習を見てもらおうか」

部員の自己紹介がひととおり終わると、すぐに実践に入った。

心も作業に取りかかった。まずは製作図をチェックする。この製作図は昨日やつとできあがった。寸法のほかに作業の順番や送りの回転数、それにかかるおおよその時間などが細かく書き込まれている。

安定してきれいな面が出せなかつたので、心はデータを取ることにした。切削面がいちばんきれいになり、かつ正確な数値を出した時のダイヤルの合わせ方を書きとめ、原口や亀井の速度も参考にしながら数値^⑨を割り出した。一週間かかって、すべての作業箇所^{かしよ}の回転速度やダイヤルの合わせ方を割り出した。この数字さえ忠実に守れば、すべての箇所が美しく仕上がるはずだ。

どうしても（ものコン）に出たい。けれど女だから出られたと言われたくない。それならば^A

心は決心した。どこもかしこも課題数値びったりな完璧なものをつくらう。だれも文句は言えないような。

心は製作図を見ながらそとつまみを回す。右手のこぶしを握り、つつつと細かくノックするような慎重さで力を加え

た。三回。つまみはそれを受けて、メモリとメモリの間を目には見えないくらいのすきま分縮めた。

OK。

心の中で小さく確認する。

スイッチを入れる。回転が始まる。バイトが工作物に触れる。丸棒の表面が薄皮をはぐようにはがれ、新たな色が生まれ

た。削るべき長さを削り、回転を止める。すぐに測定器をあてる。デジタル表示が行きつ戻りつしたあと確定した。

55.02。

OK。

崎原さんは旋盤に近寄ってきた。

「確かに数値はいいんやけど、面が少し粗い^①のは、恐る恐るやっているからだと思うんよ。回転数に合わせようとするばかりに、手元が少し遅れとるんやないかな。最初のほう、バイトがうまく触れてなかった」

「はい」

心はうなずく。確かにそうだった。バイトの先から少しだけ火花が散ったのを、崎原さんは見逃してなかったのだろう。ちゃんと削れていないと火花が出るのだ。切削音も汚かった。

「ちよつと替わつてくれる？」

「あ、はい」

①心は崎原さんと交替した。保護眼鏡をかけて崎原さんは旋盤に向かう。体の小さな崎原さんはハンドルを握ると、やつと

刃物台がのぞき込める位置にまでしか顔が来ない。心ならば体を乗り出さなくても全貌が見えるが、上体を精いっぱい伸ばさなくては、工作物が見えないのは、正直に言つて、やりづらそうだった。

ところが。

心は息をのんだ。崎原さんの心出し作業が、あまりにスムーズだったからだ。

まず工作物を取りつけるためのチャック締め(注)のあつけなかつたこと。チャックを閉じるためのボルトの締めつけは、心のみならず男子でさえ、慣れるまでは手こずる箇所だ。そこを崎原さんは、表情ひとつ変えず

I

やっている。

小柄な体のどこにそんな力があるのか驚くほどだ。それから刃物台のバイトをチェックし、キリコを払い、切削油(注)をつける。あたりまえの作業のひとつひとつがこなれていて、無駄がない。

崎原さんは、両手で左右のハンドルを素早く操(工)つて、バイトの場所を合わせ始めた。微妙な空間を探るように調節する手には、余分な力がまるで入っていないことがわかる。体全体がしっくりと機械になじんでいるという感じだ。

① シュルシュルシュル

ほどなく切削音がきこえてきた。

どきん、と胸がはね上がった。

これまでにきいたことのないような音だった。一点の濁りもないような澄み切った高い音。原口や亀井の音もきれいな音だけ、それよりも少しだけ重い。それでいてカーン(E)と空まで突き抜けるような音だ。力強く上り詰めるような音。

心は工作物を注視する。

鉄が色だけを残して回転していた。加えるべき回転が十分に与えられて、鉄がはかないシルエツトのような姿になっている。その先端に、進むべきところまで進んだバイトが軽く触れていて、そこからきらきらと飴細工(あめ)のようなキリコが生まれている。心は食い入るように見つめた。

これが世界を目指す技術者の技だ。と思うと、足が震えた。

柔らかな薄いベールをはぐように表面が削られると、新しい面が現れる。この鉄をどう表現したらいいのだろうか。なめらか。しなやか。柔らか。

硬くて強い鋼はがねに与えられる表現とは、正反対にあるような形容詞ばかりが浮かんできて、心しんは息をするのも忘れた。

荒削り、中削り、仕上げ削り。削るたびに銀色が、白く II 輝きを増す。バイトは一定方向に工作物をなで、それを繰り返して停止した。

「崎原さんはそこで初めて測定器をつかんだ。

「私、身長が百五十五センチしかないから、最初はこの計測がやりにくかったんよ。さすがに慣れたけどね」

崎原さんはつま先立って、測定器を加工物にあてた。正確な測定のためには、測定器を真上からあてなくてはならない。ちよつと体の向きを変えれば、視点が加工物の真上になる心しんとはちがい、身長の低い崎原さんはぐつと上体を伸ばして、のぞき込むような形になる。確かにやりづらだろう。

「チャック締めなんかは、腕を鍛えれば力をつくけど、身長はもう止まったしね」

あ、そうか。

b ふいをつかれた感じだった。崎原さんはもともと力持ちなんかじゃないのだ。見かけどおり華奢ぎゃしゃな女性なのだ。

F 崎原さんが乗り越えてきたハンディ。それはたぶん、自分の比ではなかったはずだ。

55.00。

表示はぴったりの数字で確定した。

「すごい」

しかも、仕上がりの面の美しいこと。そこから光でも発せられているのではないかと思うくらいだ。

「すごいです」

② 心はもう一度言った。

「ありがとう。でも、この程度では世界は取れんよね」

崎原さんの笑顔に少し悔しさのようなものにじむ。二十二歳。若手技術者が技術を競う〈技能五輪〉出場への資格は二十三歳までだ。秋までに二十三歳になる崎原さんにとっては、今年が最後のチャンスとなる。

「三郷さんも、〈ものコン〉に挑戦するんですよ」

「はい。でもその前に校内選考が」

「私も高校生の時は校内選考に一回落ちたんよね。技能検定二級の実技では、途中パニックになって泣いてしまったし」

崎原さんは思い出すように言った。

「そうなんですか」

「途中でバイトの選択をまちがってね、すぐに取り換えて作業を続ければ取り返せたんかもしれんけど、頭が真っ白になってしまつて。涙がぼろぼろ出てきて、どうすることもできんやつた」

③ ……………

ちよつと想像してみても、ひやりとする。練習に練習を重ねて臨んだ本番で、思わぬピンチに見舞われる。周りの選手は順調に作業を進めている。自分だけが打ち捨てられたように進めないなんて、泣いてしまうのもよくわかる。

「私もあの頃はかわいかったよ」

強い女になってしまったとばかりに、崎原さんは苦笑いをした。

③ 「やっぱり自分が女子つていうことを、意識しますか」

心はたずねてみる。

「するよ」

「崎原さんはあっさり答えた。」

「こういう世界にいと、何につけ目立つよね。もしかしたら、普通に共学の学生とかOJなんかよりも意識させられるかもしれないね」

「確かに」

「工場の上司には、『女には現場はあわん』とか思いきり言う人もいるし、〈技能五輪〉の選抜選手に選ばれば、同期の男から『女は得だ』みたいな目で見られるし。最初はいややったね」

「ああ、やっぱり」

「でも、最近はそのそれでいいって思える」^④

「いい、ですか」

「だって、考えたって仕方ないでしょ。それに、女子ってことで得をしとることも確かにあるのよ。特に、会社の宣伝ってことを考えれば希少価値があるほうが、インパクトがあるでしょ。男性の同期よりも優遇されてる面は確かにあるなっと思う。だからそのお得だけ十分受け取っていいと思うよ。性差も自分に与えられた能力のひとつよ」

「性差も能力……」^⑤

「うん。自分のままでがんばればいいと思う。性別変える気ないし、他人にもなれんから。ずっと自分が続けていく」
崎原さんはどこか照れくさそうに笑っていた。その顔に、新聞の写真が重なって心ははつとする。

あれは何かをやり遂げた人の顔だったんじゃないか。たくさんのハンディや困難、苦しさを乗り越えたり切り抜けたりしながら、何かをつかんだ人の顔。赤の他人の祖父にどことなく似ていたのは、そのせいなのかもしれない。

「ものをつくるのに、男も女もない」

祖母の言ったことが少しわかったような気がした。目の前の崎原さんは、性差の区別などなくとても自然だ。ただ、自分の歩きたい道をひたすらに歩いている。

私も自分の足取りで歩いていこう。

⑤ 百五十五センチの崎原さんが、とても大きく見えた。

(まはら三桃^{みつと}『鉄のしづきがはねる』より)

※出題にあたり、本文を省略したところがある。

(注) 新聞と変わらない控えめな笑顔^{しん} 心が顧問の先生に見せられた、崎原由希子についての新聞記事を指す。

バイト 〓 旋盤のときに、材料を削りだすために使用される工具。

心出し作業 〓 旋盤において、材料を回転させたときの振れを押さえる作業のこと。

チャック 〓 工作機械に材料を固定する工具。

キリコ 〓 金属を加工する際に発生する削りくず。

華奢 〓 繊細で弱々しく感じられるさま。

問一 波線部㊦「数値」・㊩「粗」・㊪「全貌」・㊫「操」の読みをひらがなで答えよ。

問二 本文中の空欄

I

 ・

II

 に入れるのに最も適当なものを、次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア はっきりと イ ぼんやりと ウ あたふたと エ てきばきと オ だらだらと

問三 二重線部㊬「息をのんだ」、㊭「ふいをつかれた」の本文中での意味として最も適当なものを、次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

㊬ 「息をのんだ」

ア 恐ろしくて呼吸が早くなった イ 緊張して呼吸が乱れた
ウ 疑わしくて深呼吸をした エ 驚いて呼吸を止めた

㊭ 「ふいをつかれた」

ア 予想外なことが起きた イ 意外なことに感動させられた
ウ 予想したものが裏切られた エ 期待どおりに終わった

問四 傍線部①「心は崎原さんと交替した」から②「心はもう一度言った」までの「心」の説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 最初は崎原さんの小さな体を目にして、うまく作業がやれるのだろうかと危ぶんでいたが、その優れた腕前に次第に感動すら覚えるようになるとともに、彼女のこれまでの努力にも考えが及ぶようになった。

イ 初めは体の小さな崎原さんを目にして、たいした腕前ではないだろうと馬鹿にしていたが、彼女の技術力の高さに感心するようになるとともに、自分もいつそう努力せねばならないと思うようになった。

ウ 初めのうちは小柄な崎原さんを見て、実力はどうせ自分の足もとにも及ばないだろうと見くびっていたが、彼女の技術の確かさに衝撃を受けるようになるとともに、自分の実力のなさに失望してしまった。

エ 最初のうちは身長の高い崎原さんを見て、本当にうまくできるのだろうかと心配していたが、彼女の作業の見事にすっかり魅了されるようになるとともに、心の内でかすかに嫉妬も感じるようになった。

問七 傍線部⑤ 「百五十五センチの崎原さんが、とても大きく見えた」とあるときの、「心」^{しん}の心情の説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 男性たちの中にあっても負けることなく、女性としての立場を最大限に活用しようとしている崎原さんのしたたかさにあこがれを抱いている。

イ 厳しい世界にあっても心に傷を負っているはずなのに、あえて明るく振舞おうとする崎原さんの前向きな姿勢に敬意を抱いている。

ウ いわれなき差別を受けてもへこたれることなく、それに立ち向かっていこうとする崎原さんの人としての強さに共感を覚えている。

エ 不利な条件があってもそれをものともせず、目指すべきものに自分なりに近づいていこうとする崎原さんのひたむきさに感動を覚えている。

問八 二重波線部①～④についての説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 二重波線部①「それならば」・②「OK」など色々な人物の内面の言葉が記されており、それによって読者がそれぞれの登場人物の視点から多角的に物語を読み進められるような工夫がなされている。

イ 二重波線部③「55・02」・④「55・00」のように非常に細かい数値を示すことで、登場人物たちが厳密な数字の世界で競っていることを表すとともに、彼らの追いつめられた内面までも表している。

ウ 二重波線部⑤「シユルシユルシユル」・⑥「カーン」などの擬音語を入れることによって、それぞれの場面により臨場感を持たせており、読者を物語の世界にいつそう引き寄せるものとなっている。

エ 二重波線部⑦「……………」・⑧「……………」はともに意外な言葉を聞いた人の反応を示しているが、⑦は単純な驚きを表しているのに対して、⑧は驚きの中にも反発がこめられたものとなっている。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

京にて、猫を失へる者あり。^⑦ 厨子小路にいたり、身をやつし尋ねしが、ある所にて不思議に見付け、「これはわが猫」と言ふ。亭主出でて、「そちがといふ証拠は」^①。また、「なんぢがといふ証拠は」^①。惜しく欲しくの争ひなれば、是非つひに分か^②たず。^③ 板倉伊賀守、是非の相手二人対座せさせ、件の猫を座敷の中に置き、一もとの主も、今の主も、手に鯉を一節づ^④つ持ちて呼べ。生まれてより育て慣れたる方へこそ行くべけれ」と。案のごとく、はじめ失ひし者の膝の上へ、鳴く鳴く行きしことよ。

〔醒睡笑〕より

(注) 厨子小路 地名。

是非 どちらが正しいかどうか。

板倉伊賀守 江戸で奉行(司法を担当する役職)を務めた人物。

件の 問題になっている。

鯉 鯉節のこと。

問一 二重線部⑦「失へる」、①「なんぢ」を現代仮名遣いに直せ。

問五 傍線部③「もとの主も、今の主も、手に鰹を一節つつ持ちて呼べ」とあるが、板倉伊賀守がこのように命じたのはどうしてか。最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 「もとの主」と「今の主」の思いの強さを比較するため。

イ 「もとの主」と「今の主」の条件を等しくするため。

ウ 元気をなくした猫に好物を与えてなぐさめるため。

エ 猫の食欲を刺激して裁判を早めに終わらせるため。

問六 傍線部④「慣れたる方へこそ行くべけれ」の本文中の意味として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 慣れている者の方へ行くはずがない。

イ 慣れている者の方へ行くのがよい。

ウ 慣れている者の方へ行くに違いない。

エ 慣れている者の方へ行くだろうか。

問七 本文に関する説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 「もとの主」の家を離れた猫は、「今の主」のもとで生活することに慣れつつあったが、「鯉」の匂いを嗅いだことで「もとの主」との生活を思い出してうれし涙を流した。

イ 「もとの主」は、自分のもとからいなくなった猫の所在を突き止めたが、簡単に取り戻すことができなかったため、「板倉伊賀守」に裁きを依頼した。

ウ 思いがけない形で猫を手に入れた「今の主」は、猫が自分のもとから去ってしまうと覚悟していたが、最終的に自分を選んだことに喜びを隠しきれなかった。

エ 「板倉伊賀守」は、「争ひ」を続ける「もとの主」と「今の主」に、どちらの所に戻るかを猫に選ばせるという方法を示して事態を解決に導いた。

